

# 万葉考の成立

—— 狛諸成の増訂について、其の一 ——

河野頼人

「万葉考」(以下、考)は賀茂真淵全集には二十卷あるが、こ

の中真淵が親しく撰したのは今の万葉集巻一・二・十三・十一・十二・十四を注釈した考六卷であつて、他の十四卷は真淵の歿後、残された草稿をもとにして狛諸成が現存の形にまとめたものであると、「天明五年三月十九日」に記した全集の諸成の考七序にその間の消息を詳しく述べてゐる。これによるとその十四卷は諸成の見解による増訂とみるのが自然であるやうである。

真淵の考六卷以外に於ける万葉研究を見ようとすればこれが有力な資料となるのであるが、それには増訂の作業を検討し成立について考察することが必須なものとなつて来るであらう。先づ、真淵の考六卷に引用された説は菅原長根の一例、本唐寛長の三例、根取魚彦の一例、それとその他別記に見える藤原常香・日下部高豊・飛鳥土佐・藤原福雄・小田守殿の各一例のみであるのに比して諸成の増訂を助けて著しく多くの人々の説が入つてゐるから、その検討が必要となるであらう。小稿ではそこに視点を置いて諸成の増訂を最終本たる「宮内省図書寮本を原本となし」(全集例言)てゐるといふ増訂真淵全集を用ゐて考へてみたい(以下、全集本といひ考七以下

をさすことにする)。

狛諸成と真淵との関係であるが、古く諸成を真淵の弟子であるとす説があり、事実「泉屋門人録」に、

「延享元年三月三日の並び」

四番町小普請、野田帯刀」(全集巻十二の四三二頁)

とあるが、『寛政重修諸家譜』によると、

「諸成……寛保三年十二月九日田安の近習番となり……宝曆八年十二月十八日布衣を習することゆるさる。十三年十月三日ゆへありて小普請に脱し……安永元年十二月七日致仕。八時に五十一才」(八輯、九九三―四頁)

とあつて、鈴木南陵氏も指摘されてゐるやうに、門人録にいふ延享元年に小普請であるといふのには矛盾があり(『国学者研究』所載「狛諸成翁」六九頁。但し、氏は延享元年を三年に誤つてゐる)。仮に門人録は年代にかかはらないで後から整理されたものだとすとも、諸成は真淵門であるといふことはあながちに信ずることは出来ない。諸成自身が、

「真淵はおのれがかさの下につきて仕ふまつりし人なれば、や

つがりを門にあてぶ人のつらともなまず、やつがりも師とたふともいつてをり、村田春海が諸成にあてた書簡の中にも(重田定一氏『史説史話』所載四八三頁)、又藤原菅根が諸成の編した「あかたみのすさみくさ」を写してその奥に書き入れたものにも(全集卷十二の二九一頁)真淵門であることを否定した言葉がある。春海・菅根の真淵門に於ける位置を考へてみても諸成は真淵門下ではないとするのが妥当であらう。諸成と真淵は共に田安家にあつた関係で、諸成は真淵の学間に私淑してゐたが直接には門人にならなかつたのであらう。

この諸成と真淵の関係が考七以下の増訂に大きくかかはることもなる。

さて、諸成は考七以下の増訂にあたり助力を得た人として菅根・藤原宇方伎・田安宗武・源清良・尾張黒生・橋千藤等の名を考七序に挙げてゐるが、その他全集本の注釈中に引用した諸説を集計して付表の如き結果を得た。そこでこれを次のやうに分類して考察したいと思ふ。

(一) 諸成の關係者

源清良・田安宗武・藤原中良・青柳種信

(二) 真淵門の学者・歌人

橋千藤・藤原菅根・藤原宇方伎・尾張黒生・村田春海・藤原朝恒・橋枝直

日下部高豊・千足真事

(三) 宣長及び宣長門

(四) 久老及び久老門

本居宣長・沢真風  
荒木田久老・西村重波・羽根真清

(四) 不 明

平勝谷・藤原島保・穂積與人

(注) 右の中、真淵の草稿にあつた者

千藤を通して間接に入つてゐる者  
諸成の増訂に關係なき者

(一) は諸成の關係者である。諸成の周辺にあつて親しい人をいふのである。種信もここに含めて言及することにする。

〔一〕 諸成の關係者

	源 清 良			田 安 宗 武			藤 原 中 良			菅 柳 種 信		
	認	不	否	認	不	否	認	不	否	認	不	否
考 七				•2283 •2288 •2331 •(2089)	•2270						•1860	
考 八				•1133								
考 九				•804	•(865)							
考 十		•3724										
考十一				•1664 •1742 •1790 •1809								
考十三				•496 •501 •522 •652			•596 •777 •778					
考十四	•280			•379 •379								
考十五				•983							•968	
考十六							•3821					
考十七							•3993					
考十九				•4265								
考二十				•4309 •4465 •4494	•4361							•(4402) •(4413) •(4456)
其の他				考+四別 記 = 1								
計	1	1		21 (1)	2 (1)		5				2	(3)
總計	2			2 5			5			5		

〔注〕 歌番号は引用の説の位置を示す。●「認」は全集本の認容した例、「否」は同じく否認例、「不」はいづれとも判じにくい例。又全集本述作に關係なき説も便宜「不」に入れておいた。●番号を( )でくくつたのは頭書の例。又〔 〕は間接的に出てくる例。例へば〔三〕宣長の考九の〔(847)〕は頭書であつて「與人云…を本居が…」として引用してあるものをいふ。

(二) 真淵門の学者・歌人

	橘		藤原省根	藤原宇万伎	尾黒生	村暮田海	藤原恒	橘枝直	日下部豊	千良足部
	認	不								
考七	・1823 ・2000 ・2081	・(1830)			・2004				・1961	
考九								・[894]		
考十一	・1709					・315				・(279)
考十四										
考十五	・(1062)						・3808			
考十六				・(3832)						
考十九			・4164							
考二十				・4321						
其の他				考十八に「古事記 解」を引く。 (頭書一例)						
計	4 (1)	(1)	2	1 (1)	1	1	1	1	1	(1)
総計	6		3		2	1	1	1	1	1

(三) 宣長及び宣長門

	本 居、 宣 長			沢真風
	認	不	否	不
考七		•2210	•1932	
考九			•〔(847)〕	
考十	•3668			
考十四		•(237) •(394)	•(907)	•(355)
考十六		•〔(8885)〕		
考二十		•(4418)		
計	1	1 (4)	1 (2)	(1)
總計		9		1

源 清 良

清良は田安藩士。真淵門の学者として万葉集の普及発展につとめてゐる。その主なる業績を挙げると、京都の邑井敬菴が安永九年勝手校合した邑井本古葉略類聚鈔を清良が写し、それを借りて橋千蔭が寛政六年に写し、「万葉集略解」（以下、略解）にも此旨に言及してゐる（佐佐木信綱博士『万葉集の研究・第二』所収「古葉略類聚鈔」三一七頁）。又、文化七年、師説によつて万葉集の本文を書き改め、巻の順序をかへた「定本万葉集」を編纂した（『校本万葉集』一）所載「万葉集研究史」五一八―一九頁）ことなどである。（猶「琴後集」を見ると、真淵苦心の考六巻の刊行に努め、真淵死後五十余年の文政七年にはじめて揃つて世におくつた熊本の長瀬真

(四) 久老及び久老門

	荒 木 田 久 老			西 村 羽 根	重 波 真 清
	認	不	否	不	不
考十四		•405 •(239) •(263) •(295) •(315) •(323) •(362) •(398) •(406) •(410) •(420) •(434) •(482)		•(323)	•(265)
考十六		•(3791) •(3796)			
考二十		•(4299) •(4516)			
計		1 (37)		(1)	(1)
總計		38		1	1

幸とも先達として交つてゐる。）

さて清良の名は全集本には、考十（巻十五）の三七二四に、「……すへて古言のものしらへぬを源清良とおのれ論て東方呂真淵考を交とられぬはすていふめり」（全集巻二の四一四頁）と、考十四（巻三）の二八〇に、「……と真淵いへり猶清良諸成案に……」（全集巻三の二二三頁）

とある二例のみであるが、久松潜一博士が紹介された諸成書入本万葉集の巻十の裏表紙見返しに「源清良ぬしにすがりて」ともあり（『万葉研究史』所収「諸成書入本万葉集」一七一頁）、これらで諸成清良の二人は一緒に考へを進めてゐること、且つ真淵説を超えよ

(五) 不 明

	平勝睿	藤原昌	穂積 奥人
	不	不	不
			例に 計181のみ 頭書(考七~考二十 にわたる。)
考十三		・(751)	
考十五		・(913) ・(920) ・(1064)	
考十六	・(3791) ・(3821) ・(3868)		
計	(3)	(4)	(181)
総計	3	4	181

うとさへしてゐることがうかがへる。又その上真淵の残したものを  
受け継ぐとはいひながら、考十の首に、

「此巻を十の巻とする事は源清良とおのれくはしく論てさだめぬ」(佐佐木博士『竹柏園藏書志』九八頁万葉考狼譜成本の項。

これは後に『万葉五十年』にもとりあげ紹介されてゐる。現在お茶の水図書館藏八以下、お茶の水本V。この本は菅根の項にあげた博士の解説にもある如く全集本の前の姿を示してゐる。猶お茶の水本には考十・考十一の表紙に紙を貼布して考十では「……清良ト云人順ヲ改メタル由論あれと猶之のままとし(虫損)」とある。考十一もほぼ同意見を述べてゐるが、諸成以外の真淵の巻序を支持する人の筆であらう。

といつてをり、真淵が「巻のついで」で、

「……今の九を十とす、八天平五年の秋に、遣唐使の発船する時の寄あれは也V今の十五を十一とす、……」(全集巻二の二頁)と冒ふにもかかはらず、全集本では考十・巻十五・考十一・巻九として真淵説の逆の順序にならべてゐるのである。

又、宗武の説は清良を通してうかがつたと考七序にいつてをり、且つ真淵の学問を諸成に直接に伝へる立場にある人として諸成のよき助言者となり、全集本に名は余り出でゐないとしても、もつと多くのものが影響してゐるとみてよい人物である。

田 安 宗 武

宗武の死は明和八年六月四日五十七才、諸成がまだ田安家にゐた時であるから(当時五十才、翌年致仕)、清良を通して宗武説をたづねたといふのは、後年考七以下の増訂にあつた宗武の残した諸説を清良を通してうかがつたことをいふと解釈してゐる。

全集本の宗武説はすべて「やごとなき御説(御考)」として引いてゐる。計二十五例、中頭書二例。この頭書は諸成の紙で本文の補注である。この数は他に比較して断然多く且つ否認した例もない。

この中から注意すべき一二例を挙げてみると、考七(巻十)の二二三で、

「皮為酢<sup>シノメス</sup>す。A冠辞やことなき御説にすべてしのでふ名ある

物は皆かはを帯てしなひたりし竹てふ物もさ也さらば皮為酢すと尋るは皆しのと訓へし……賀茂真淵冠辞考にいへるたがひてよらせ給ふ事古へ今の言にもかなひよくわかれ聞えめてたき御説なればあげたりV穂庭<sup>ホニバ</sup>……」(全集巻二の一八四頁)

といつてゐるのは、「冠辞考」の「はたすき」の項の「……又皮の字を書きたるによれば、はたのたを濁りて膚<sup>ハダ</sup>のこ

よるとし、さて穂を皮にふくみもて漸に開出るなれば、はだすゝ  
きといふらんとも覚ゆ、……」（全集巻五の一九七頁）

を念頭においてゐると思はれるが、これは真淵説の方が穏やかであ  
らう。又、卷十九（今同）の四二六五で板本の「……白香著、朕裝  
桐爾……」について、

「白香著、人白香は借字後括の意此解冠辞考の意と違へりやこ  
となき御説により委は別記にいふ」」（全集巻四の二三三頁）

といふのは踏成の別記が現存しないので詳細はわからないが、宗武  
の「摘要冠辞考」にはほぼ同様の説が見える。踏成は「冠辞考」の  
解をすてて宗武説をとつてゐるのである。

これらの例をみると、全集本に表はれてゐる所では真淵説をこえ  
て絶対的とも見える評価を宗武の説に与へてゐることに特色があ  
る。これは又踏成の述作の態度を暗示してゐるともいへる。この点  
は続稿において更に詳論したい。

藤原 中良

伝は調査してゐないのであるが、例へば、

「……を云と踏成か友藤原中良のいへるはよし」（全集巻三の四二  
八頁）

と「踏成か友」といふ例等があるから、ここに分類出来ると思ふ。  
引用の説五例は何れも解釈で否定したものなく好意的に取りあつか  
はれてゐる。教的にも多い方である。鶴、お茶の水本卷九の八〇四  
に全集本にない中良説があり、「此事を頭注に引べし」といつてゐる。

青柳 種信

「本居寛長門人録」の「寛政元年己酉」の所に、

「筑前 福岡 家中

青柳大藏種信人初勝次種信 三月二

十九日入門」」（本居全集首卷三六頁）

とあり本来は宜長門に分類すべきであらうが、この入門は江戸に行  
く途中のことであり、実際には寛政元年から六年初にかけての江戸  
祇役中宜長門とはいつても常に踏成について其の説を聴いてをり、  
殊に万葉集に關する修養は踏成から得てゐるものが多いといつてよ  
いやうである。即ち、種信自記の年譜に、

「寛政元年己酉三月八日同寮十八人と共に江戸邸に宿直す勝次年  
二十四……」

四月江戸に宿椀田邸に直次。今年江戸古学の士を尋訪て野田大人  
へ助教殿に謁す泉居翁の門人……此ぬし厚く親み給ひて泉居翁  
の習給へる書種々万葉全部の考等を伝へ給ひ且賀茂大人の秘置れ  
し斉明紀の童論の解をも自ら写して授られき五年六年が間此の大  
人の恩もまた広大也といふべし。」（春日政治博士『青鶴集』所  
収「青柳種信の事ども」一四〇頁所引）

とある。二十四才の寛政元年初夏踏成をたづねてゐる。そして、同  
三年正月、江戸の種信が栗田土滴にあてた書簡に、

「岡部翁の門人御旗本衆野田助教と申人、皇朝学専門ニ而万葉考  
岡部翁之習述を尊継被申候、此人なと知音ニ相成時々出会仕候、  
其外橋千藤尾黒生杯両三人得志之仁御座候」（『万葉集大成・  
11』所載中村幸彦氏「万葉集をめぐる国学者の生活」二二〇頁所  
引）

とある。野田助教は踏成である。かうして種信は踏成を中心に  
千藤・黒生等真淵以来考に關係深い人々と交はりながら、踏成の写  
した考を併写してゐる。この間の事情を『校本万葉集一』の「万葉  
集註釈書の研究」によつてみると、校本万葉集に用ゐられた竹柏園

藏種信本の例へば考六の終には刊本に見える明和五年十一月尾張衆生の跋の外に「安永七年五月狛諸宗理写」の奥書があり、更に、「ことし寛政のはしめの年はすの日鳥か暗吾燭国なる大城の本置閣の邸中にて高麗宿禰大人躬らかき給へる本をもて書うつしぬ

大藏種信(花押)」

とある。江戸に出るとすぐ諸成を頼つて万葉研究に従事してゐるところがわかる。又考八(巻七)の終には、

「天明六年三月始而六月三日物誨余中書畢ぬ

毛呂成六十四齡

寛政五年七月中旬書写之

青柳種滿

同年八月廿日書入畢」(以上四四〇一頁)

ともあり、諸成の考を書写した上自説を書入れてゐる。そして種信本の考九(巻五)の如き、

「翁自身(頼云ふ、種信)が諸成本を全然書改めたやうにさへ見えるのであつて、流布本万葉考(真淵全集本の如き)とはよほど異なる……」(春日博士、前掲書一四一頁)

書である。そして諸成のものには皆省いてあるこの巻に特に多い漢文漢詩を悉く解釈してゐるのである。これらを通して江戸に出てからの種信の万葉研究の進歩の状況が如実にうかがへるやうに思ふのである。そしてその多くを諸成から得てゐるのである。

さて全集本に見える種信説は、考七の一八六〇の、

「花咲而、奥者不成登鑑。長気。^気は来経の約にて長き月日

も年も来経たるをいふ言ならんと吾友大藏種信かいひし」(全集

集卷二の八〇頁)

及び、考十五(巻六)の九六八の「水城」に注して、

「諸成云吾友大藏種信は筑前国早良郡岡の者也種信云水葦の水城と集中よめると水葦の岡とよみしは別地也水葦の水城とは水くきのみつゝしきとかけたる意歟……」(全集卷三の三五七頁)

と種信が出身地の水城について以下考証をしたものが長文にわたつて詳しく引用してある二例と頭書の三例がある。

気位の高いといはれた六十翁の諸成が、二十台の青年種信を「吾友……」として引くこれらは万葉研究を中にした二人の關係の密なることを反影してゐると思はれるが、この外お茶の水本には全集本にない種信説が考七の一九三七に一例ある。又、考四の二六二二にも一例ある。

かりてみると、二人が違つた寛政元年以後の成果が全集本に入つてゐることがわかる。諸成の考七以下の増訂は天明五年の考七序を書いた後も書き継がれたが、お茶の水本考十二(巻九)の「天明六年九月始十月晦終踏成六十四齡」とあるのや前掲の竹柏園藏種信本の奥書からみると天明六年終から七年初にかけて大凡その完成を遂げてゐたのではないか。お茶の水本には一八六〇の説も九六八の説も朱書入になつてゐる所などから見ると、その後諸成は題、補訂し書入をしながら整理を續けていつてゐるものと考へてよからうと思ふ。

所で後述するが種信與人の書入が寛政七年の日付を有してゐることをみると、この頃は全集本は一往諸成の手をはなれてゐたといへると思ふ。さうすると種信が福岡に帰つた寛政六年初以前、もつと限定すると考八にある種信の書入の時期五年八月廿日あたり諸成の考七以下の増訂は終つてゐたのではなからうか。そこで私は凡そこのあたり即ち遅くとも寛政五年末頃が全集本本作の下限ではないか

と考へてゐる。

猶、頭書三例は何れも考二十（今同）にあり諸成の手で「よしよるへし」とありながら注の本文とは違つてゐる。これは種信説を諸成が替入れながら本文までは訂してゐないのであつて、折にふれ替き訂していつてゐる諸成の意志をとどめてゐるとみることが出来、全集本をもつて諸成の決定稿といふことは出来ないであらう。

かうしてみると、考の中に種信の諸成との因縁は決して浅くない。ここに分類した所以である。

さて以上の人々の間で全集本引用の諸説の奥に七割が占められてをり、且つ否認した例は一つもない。全集本はほぼ諸成と諸成周辺の人々の説を中心に、それに宗武説をとり入れてまとめられてゐるといへよう。以下述べる他のグループとは余りにもはつきりした差を見せてゐるのである。

次に(口)の真淵直門のグループについてみてみたい。人数は多いのであるが、説の引用は千蔭・菅根をのぞいては各一例づつせいぜい二例しかない。

### 橋、千、蔭

全集本にみられる説六例（中頭書二例、諸成が記したもの）はすべて認容例で、ほぼ略解の脱くところと一致してゐる。所が、考七の二八三三、

「来鳴鳥。ハかは鳥は今田舎人のかつぼう鳥てふは即喚子鳥也

今本某と有は其の誤ならんと橋千蔭のいへるによれり」(全集卷二の七二頁)

とあるが、略解には、

「来鳴鳥」(日本古典全集本第四の一八九頁)

とあつて一致しない。又、考七の二〇〇〇に、

「天漢。安源丹。船浮而。我立待等。ハ今本秋立待等とある秋は私の誤ならんと橋千蔭がいへるによるへし」(全集卷二の二一八頁)

とあり千蔭説として採用してゐるのであるが、略解をみると、「秋立待等」について、

「宣長云、秋は私の誤なり。ワガタチマツトなりと言へるぞ善き。」(第四の二五七頁)

といふ説があるので、実際は本居宣長の説である。

全集本のこれらの例を、千蔭の略解の筆をとつたのが寛政三年二月十日、寛政八年稿成り、巻五まで刊行といふ事情とあはせ考へてみると、千蔭の略解以前の説が口頭或いは書信などで全集本に参加してゐると思ふ。千蔭の説が略解で交つてゐるのも、宣長の名を逸して千蔭説として引用されてゐるのもこの為であらう。

### 藤原菅根

諸成と菅根の関係は知らないが、かなり深い交際のあつたことは事実である。

全集本には菅根説は頭書一例を入れて三例しかないが、考七序に「真淵がともとせし藤原菅根にとひ」といひ、又お茶の水本を解説した中に、

「……考の本文並びに頭注に、諸成案と記せるところ少からず。また菅根案として付箋せるも屢々見え、塗抹して補訂せる亦尠からず。諸成が中世の識語あり。その再稿本にて、菅根の校勘を経たるもの、全集本は更にこの本を改訂して成りたるものなるが如し。……」(佐佐木博士『万葉集事典』六七頁)

ともあるやうに、菅根の助力には著しいものがある。ただし付箋の菅根案は多く諸成案に対する菅根の疑問を記したものである。そして「菅根の校勘を絶た」といふのは付箋をさしていはれるのであると思ふが、これが直ちに全集本に表はれてゐるかといふとさうではないやうである。解説の中の「塗抹して補訂せる」といふのは菅根案によつてといふことであらうが具体的にいつかみえなかつた。再調査したいと思つてゐる。猶、全集本本文に見られる二例は認容した説である。

以下は全集本に引用された説が一つ乃至二つづつ見えてゐる者である。

#### 藤原宇万伎・尾張黒生

この二人は考七序に名があがつてゐることは既に述べた。

宇万伎説は、考二十の四三三一に、

「於佐倍乃城會等。八真淵か友藤原宇万伎いへらく城を伎といふは古訓也加古美の約伎也敵もる為に築たる城廓をふるくは伎といひし也稱城水城大城などいふ伎也こは加古美てかまふる所なればしかいふならん又地をならすを志呂といふこも古言也同字を訓し故後には城を志呂といへり」(全集巻四の一六八頁)

とある。又、考十八(今同)の四一二五の頭書に、

「古事記の小注の事は古事記解にくはしくす……」(全集巻四の五七頁上)

とある「古事記解」は宇万伎の著。これはお茶の水本にも異同なくあり明きらかに諸成が記したものとと思ふ。

宇万伎の説はこれですべてである。考七序には「藤原宇万伎がかいつけおけるふみらこひ得て」とあり、又既に安永六年六月十日五

十七才で京都でなくなつてゐるから、全集本に於ける宇万伎の参加は書物を通してかと思はれ、極く乏しいのも理由のないことではない。それに宇万伎の書物といふのが師説を記したものをさしてゐるとすれば宇万伎の名の少いのは猶の事当然であり、且つ『万葉五十年』所収の「藤原宇万伎の万葉集研究」によると宇万伎の研究には独自のな面は乏しいやうである。この点も影響してゐるのであらうか。

黒生の説は一例である。但しお茶の水本には「黒生云」として付箋が少々あるが、全集本の内容に影響を及ぼしてはゐないやうである。

しかしこの二人は「万葉集大考」に真淵が、

「又此考をすべて彼これ正しなし助けなせしは、藤原宇万伎、尾張の黒なり、むら田の春郷なり、」(全集巻一)

といつてをり、真淵の考六巻の述作を助けてゐるのであり、又、明和六年五月九日宣長宛書簡に真淵が、

「……御当地拙之門人才子ども近年多死去いたし漸古言穉之序を習たる宇万伎八加藤大助といふ大番与力也」尾張黒生といふのみ今御当地にては有之候八黒生は野間甚四郎といふ町人也」物而門弟に不仕合にて……」(全集巻十二の五四九頁)

といひ老後僅かに喝望した門弟であつたのである。だから宇万伎などからもつと影響をうけてしかるべきであると思ふが、全集本に表はれてゐる所のは甚だ乏しい。これは増訂を見る上に注意すべきことであると思ふ。

#### 村田春海

兄春郷は「万葉集大考」に名があがつてをり(前掲)、又この兄弟は真淵の宝暦十三年の大和旅行にも同行してゐるのである。しか

し春海の全集本に於ける位置は決して高いものではない。考十四の三一五に、

「見吉野之。芳野離宮者。山可良志。其有師。永人永は水の誤ならんと村田春海がいへるしからんV可良志……」(全集巻三の二二九頁)

とある一例のみ。しかも一往掲げておくといふ程度、且つこれは「代匠記・初稿本」の説であつて春海の創見ではない。この上に久老の説の昏入があり、それにはこれを契沖説といつてゐる。それなのにここでは一言もふれてゐないのは諸成の不勉強といふよりも、春海説に対してさして価値を認めてはゐなかつたといふことを意味してゐるのではなからうか。春海の説を吟味しようといふ気持はなかつたのである。

これを裏づけるやうな春海の諸成に与へた借簡があるが、これを見るに諸成の学問に対して春海はかなり批判的であり、考七以下の増訂に対してもなかなか手烈しく、春海が助力したといふやうな様子は全然ない。増訂についても、

「故県主の学問の趣意と御思召行違ひ申候様なる所も多く有之候義は、千藤・黒生なども毎度左様申居候事にて御座候……、県主の学問の趣意を御繞ぎ被成候思召にて県主の意と相違ひたし候ては、甚なげかけしき事にて御座候……、一体貴君御学問の様子を觀ひ申候に殊之外五十首にのみ御泥み被成候て、古昔の例に御かまひ無之臆説をのみたくまじう被成候所、県主の意とは甚行違候事と被存候……、」(重田氏、前掲書所載四八三―四頁)

とある。千藤・黒生等(二)に分類した人たちの諸成観の一端もうかがふことが出来興味深い。千藤・黒生等も積極的な助力者ではなかつたのである。

藤原朝恒

菅根の夫である。考十六の三八〇八に一例「真淵かとも朝恒いへらく」として簡単な解釈を心づきめいて併記してゐる(全集巻三の四一九頁)。

(二)のこれ以後の人のものは諸成が直接得た説ではないと明きらかに断定出来るものである。

橋枝直

一例、板本の「阿庭可遠志」を改めて考九の八九四に、

「問選可<sup>モチ</sup>辺志。人今本……何の事ともなし一本庭の字を選とす此句上の御手掛且とある句よりかゝれば彼選の字より考て阿は問の誤とし違は辺の誤として問選可<sup>モチ</sup>辺志なるへしと橋枝直かいひぬるをさる事なるへきとて真淵が改たるによりぬV」(全集巻二の三四九―五〇頁)

とあるが、「真淵か改たるに」従つたとあるやうに諸成にとつては間接的に入つてゐる説である。猶、略解は板本に従つてをり、この説はここだけに見えるものである。

日下部高豊

高豊説は一例。考七の一九六一の、

「吾<sup>ワカホメキヤ</sup>干領。人今本吾乎領とありて……日下部高豊云乎は干の誤也こをよしとして改つ……」(全集巻二の一〇八頁)

は「万葉集問目」(以下、問目)六に、

「(真淵)……こゝに高豊といふ人、乎は干の字かといへり。……さては、わがはずきぬのといふとせん。……」(増補宣長全集巻十の五八五頁)

とあるのと比較してみれば、問目を諸成は見てゐないので(根拠

は草稿で述べる、真淵の草稿にあつた説といつてよい。

千足真事

頭書が一例ある。誰の筆とも断定出来ないものであるが、増訂には闕はりなく後からの補注と思ふ。

以上(二)については僅かに千蔭・菅根がめだつてゐるのみで、宇万伎・黒生すら全集本に占めてゐる位置は低い。又、千蔭・黒生・春海等は諸成に対しては批判的であつたことも注意すべきことである。それに菅根も亦、諸成の考については異見をもつてゐたと考へてよい。

次に真淵門の万葉研究者として大きな業績を残してゐる宣長・久老については別に分類して述べることにする。

(三)は宣長及び宣長門である。

本居宣長

宣長にとつて万葉研究はその研究の主流を占めるものではない。しかし万葉研究史の上からみると、後世に対する指導的地位はその後の万葉研究に深い影響を及ぼしてゐるのである。

がしかし全集本に於ける宣長説は本文中に三例、中一例は否定し、中一例は認否不明、認容の例の考十の三六八の、

「気奈我久之安礼婆。入旅にある日久也気奈我久之気は伎武加倍を約て氣といふ也年月日は来迎るなれはいふ本居宣長か気は伎倍の約にに來経也と云も同じ意也月日の久を云」(全集卷二の三九三頁)

も「と云も」とあり積極的にとりあげられてゐるとはいへないと思ふ。

宣長説の出典をみると、考七の一九三二の説は問目七(宣長全集卷十の五九三頁)及び略解の中に見える宣長説(第四の二三二頁)

と一致し、考七の二二一〇の説は問目七の説(宣長全集卷十の五九六頁)と一致する。考十の三六八の説については出典を見出してゐない。

これによると、問目と諸成とは関係なく、且つ略解は前述のやうに出来てはゐらず、又一九三二の説が略解にあるのを見ると宣長説はおそらく千蔭を通して入つてゐるとみてよからう。そして千蔭の項で千蔭の説と宣長の説が混同して記してあつた例をあげたが、かゝした事情に基く所があつたのである。

頭書六例いづれも出典など明きらかにしてゐないのであるが、例へば考九の八四七、

「與人云こゝの遺知ち言を本居かとりたて……」(全集卷二の三二五頁上)

考十六(今同)の三八八五、

「本居は……と云り與人按に……」(全集卷三の四五八頁上)は明きらかに與人の書入で増訂には関係ない。他の四例ははつきりわからないのであるが、前後から判断して右に準じて考へてよからうと思ふ。

かうしてみると宣長は考七以下の増訂には直接参加してゐないといへる。これは真淵の考六卷に於ける宣長説の参加とは格段の差である。

沢 真 風

宣長門としては真風が一人だけである。真風説は考十四の三五五に頭書が一例あるが、全集本の内容とは関係のない後からの書入とみられる。

四には久老及び久老門を分類して述べる。

久老の説は一例をのぞいてすべて頭書である。

考十四の頭書は「万葉考榎乃落葉」(以下、榎乃落葉)に、考十六の頭書は「万葉集十六卷・竹取翁歌解」に説く所と細部まで一致してゐるからこれらから引用し替入れられたものである。そして前者「寛政十戊午歳三月」、後者「寛政十一年癸巳未八月開板」と夫々に刊記があるから、これらの頭書は寛政十年以後のもので全集本の稿が了つてから後の替入である。

又、久老の考二十の頭書の二例をみると、四二九九「年月波。安多良安多良爾。……」に、

「古本はいづれも安良多安良多とあり今本に安多良安多良と有は誤也久老云」(全集巻四の一五三頁上)

四五二六「新。年之始乃。……」に、

「古葉類聚抄に此語をあらたしきとよみたり古書には新をあたらしとよめる例なし阿多良は借の意なるをさいはらに阿多良之伎年のはしめとらひ誤れり久老云」(全集巻四の二六六と七頁上)

とあるが、これは天明五年から寛政八年迄十一年間にわたつて書き入れられた射和文庫藏久老替入本万葉集に、

「新年は皆、アラタシキと訓ず。朱、或いは借にて寛永版本を直す。卷十七葛井連云々歌詞ある歌、新年朱にて、アラタシキと直し朱替頭注あり。

『久老云、新年ハ必ズアラタシキトヨムヘキヲ催馬楽ニウタヒアヤマリシヨリアタラシキトヨムトナレリ』(千田憲先生の御教示による。)

とある朱替頭注と明きらかに関係がある。催馬楽を引いて訓の転化を云々してゐる所など全く一致してゐる。だが、四二九九の頭書には続いて奥人のこれに対する批評があるから、この頭書は考十四・考十六のものよりけ早い時期のものである。しかし、この二例も久老説の他の替入の例の場合などからみると、やはり後の替入といふべく、全集本の四五一六の訓「アラタシキ」も後から替入れられたもので、お茶の水本及び校本万葉集に用ゐられた考には「アタラシキ」とあることがこの場合の証拠とならう。この「アラタシキ」の訓は恐らく諸成の関知してはゐないものであると思ふ。

しかし、この久老の考二十の頭書二例が入つて来た経路は知らない。

本文中にある唯一の例の考十四の四〇五は、  
「社師留鳥。……〇留鳥を古本には怨罵に作ると久老いへり」(全集巻三の二七七頁)

であるが、これは榎乃落葉と全く一致し後の替入と断定出来るからこれも関係はない。

久老門の西村重波・羽根真清の名が頭書に各一例あるが、何れも榎乃落葉に引用されてゐる説をそのまま引いたものである。

かうしてみると久老及び久老門は諸成の考七以下の増訂には何らの形においても全然関与してゐないのである。

(四)に分類したのは伝等不明のものである。

平勝・藤原昌保の説は全部頭書で夫々お茶の水本にも既に見られ諸成の書いたものであるが、本文に直接働きかけてゐる所はない。

## 穂積 奥人

全集本を通じて頭書のみ一八一例あるが、考十二(卷八)の終に、「寛政とふ七年六月廿日穂積奥人五十三齡」(全集卷三の八八頁)

とあつて、これは奥人の頭書書入の時期を示してゐると思ふ。これは諸成が考七序を書いてより約十年後のことであるが、奥人には種信の項で述べたやうに全集本は寛政五年頃まで書継がれてゐるので或いは諸成と関係があつて書入れられたものかと想像されてもいいのだけれども、お茶の水本には全然ないこと、又奥人の頭書は全集本の内容に直接の関係もないことなどから、考七以下増訂には全然関係のない後からの書入であるといへる。奥人の伝は不明。しかし「万葉拾穂抄」によつてゐる書入が多いので、さうした方面の学派から見た全集本批判としてゐることが出来ようかと思ふ。

以上諸説を検討したが、かうしてみると全集本は真淵の草稿に、諸成と諸成周辺の人々の説とそれに宗武説を加へそれらを中心にして増訂を行つてゐるのであり、真淵の教へをうけたもの名はあつてもたまたま江戸にゐた人が主であつて、それにこれらの人々は必ずしも積極的に協力してゐるのではなかつたのである。当然その占めてゐる位置は低い。そして宣長の参加は間接的であり、久老は全然関与してはゐないのである。(仙覚・契沖や荷田春満等の説に対する全集本に於ける取りあつかひは問題が別であるからふれなかつた。)自づからそこには仮りに消長がゐるとしても真淵の学問の正統からはなれて、諸成個人の色あひが濃くなつてゐることは否定出来ないのであらう。

そこで次には諸成が拠つたといふ真淵の草稿はいかなるものであつたかについて考へてみたいのであるが、それは明和元年真淵が万葉集の注釈を志し先づ考六巻から注釈の筆を起こしたそれ以前の研究途上のもので、晩年の説のないものであつたといふ結論のみを述べ、それを諸成は以上の諸説をもととしてどう取りあつてゐるか、そして真淵が親しく注釈を完成した考六巻と全集本とは内容的にどんな違ひを見せてゐるかなどについては続稿にゆづつて述べることにしたいと思ふ。(三十四・九・十四潜記)

—— 広島大学大学院学生 ——

○小稿は、三十四年六月十四日早稲田大学に於ける全国大学国語国文学会研究発表会で報告したものの前半である。猶その節、久松潜一博士から諸成の万葉研究を書誌的に考察してゐること、又、三宅潜先生からは御手紙で琴平宮図書館蔵の真淵自筆書入本万葉集等の諸説と比較するやうにと夫々御注意をいただいてゐる。記してお礼申上げると共に今後の私の課題としたい。